

団体理事長 玉井誠一郎 66

STAP細胞が存在するかどうか検証実験を進めている理化学研究所が27日、「現時点で細胞は作製できていない」とする中間報告を発表した。その報告内容を見て、研究不正に対する理研幹部らの感性の鈍さにあきれた。科学とは、だれでもいつでも、同じ方法で再現できるもの、つまり「再現性」を有する。

再現性のないものは非科学である。検証実験では、22回も作製を試みたが一度も再現できなかったといい、既に結果は明らかだ。これ以上、国民の税金を検証につき込むべきではない。

この問題を機に、理研は組織改革に取り組むそうだが、野依良治理事長や担当理事は辞任しないという。

科学研究への信頼を損なうような大不祥事を起こしておきながら、恥や責任のとり方を忘れた幹部に、わが国の科学技術の将来を任せておいてよいのか。理研そのものに「解体的出直し」が必要ではないか。

(大阪府豊能町)